



令和2年度

鹿児島県の教育

1月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部長

霧島市立国分小学校長
鶴田 幸伸

奇跡の星「地球」にうまれて

ランドクルーザーの車を三トンほどもある風格のあるカバがゆっくりと横切っていく。背中には仲間との戦いで負ったであろう傷、赤く痛々しい。もう朝だというのに、ゆつたりと歩いている。立ち止まってはこちらを眺め、なかなか仲間のいるマラ川へ行こうとしない。

これは、先月の日曜日、知人に誘われて参加したケニアのマサイマラ国立保護区のサファリドライブでの一場面ある。現地とZOOMで結びリアルタイムで走った大草原。一時間足らずでアフリカゾウ、バッファロー、トムソンガゼル、トビなどの多くの野生動物たちと出会った。遙かなるアフリカの大地にそよぐ風を感じ、心地よい時間を過ごした。

コロナ禍も無縁に思える景色だが、多い日には二百台もいたサファリツアーの車も、全くいなくなつたそうである。動物たちにとってはこれが日常に違いない。今、やっとリラックスして過ごしているのかもしれない。新型コロナウイルス感染症により人々の活動が停滞し、三十年ぶりにインドからヒマラヤ山脈が見えた、ベネチアの水路で魚が泳ぐ姿が見られたなど聞くと、いかに人類が地球環境に負荷をかけていたのかと思わざるを得ない。

さて、これからの「社会の担い手」となる子どもたちを育む使命をもつ私たちであるが、どういう社会を目指すべきであろうか。グローバル化や情報化の進展により予測不可能な社会が到来すると言われる。技術革新によりもたらされる変革は確かに予想し難い。新型コロナウイルス感染症、経済、国際情勢など先行きが不透明なこと多い。しかし、どのような未来を築きたいのかということは明確に抱いておきたい。

私は、この生命の神秘に溢れる地球をいつまでも青く美しく残せる社会でありたいと思う。人は地球の上で誕生し、自然とともに進化してきた。地球をながしるにしてよりよい未来はないと思う。「サピエンス全史」の著者ユヴァル・ノア・ハラリ氏は、「人間の愚かさを決して見くびってはいけない。」と言っている。国連が示したSDGsはよりよい未来を創るための目標であると同時に、このままでは取り返しつけないことになるという警告でもある。マサイマラ特別保護区の野生動物たちも人間の経済活動次第では生死まで左右されるのだ。

自然とつながりながら生きていく、人とつながりながら生きていく、これが豊かに生きていくための確かな手段であると確信している。

令和3(2021)年 1月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団県校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



宇宙に携わるきっかけ

JAXA 鹿児島宇宙センター所長 川上道生

はやぶさ2カプセル地球帰還！十二月六日深夜のネット中継をみました。二〇一四年十二月三日の種子島宇宙センターからの「はやぶさ2」打上げ当時、私はH-IIAロケットの担当として打上げを成功させなければという責任感とともに期待に心を躍らせて宇宙に送り出しました。そして六年を経て星空を背景に地球に戻って来た姿に再び感動しました。宇宙に関わる仕事を続けているのはこの時のようにドキドキや感動があるからというのが正直な気持ちかもしれません。

私は兵庫県の瀬戸内海に面した御津町というところで生まれ育ちました。鹿児島のように身近に宇宙を感じられる施設がある訳ではなく、子どもの頃には宇宙や星よりも車やバイク、電車やバスなどの乗り物に興味がありました。大学では熱力学や伝熱工学を専攻しましたが、仕事場として宇宙を意識したのはいいよ就職先を考えた頃と随分と遅ればせながらです。それでも、振り返ってみますと宇宙に関わるきっかけになる小さな種は子どもの頃に植え付けられたのかなと思います。一つは体育教師をしていた父が子ども向けの科学雑誌を毎月買ってくれたこと、もう一つは日本標準時子午線が通る明石市立天文学館に連

れて行ってもらったことです。科学雑誌に掲載される乗り物の仕組みや型紙を切って作る紙飛行機が一番の楽しみでしたが、星や望遠鏡などの記事も知らず知らず目にしてたのかもしれない。また、科学館での解説そのものは十分に理解出来なかったように思いますが、ここで初めてプラネタリウムを観たことを覚えています。これらの些細な経験がその後の進路選択を左右したという意識はなかったのですが、就職を前にして眠っていた種が芽を出し「乗り物+宇宙=ロケット」の世界に導いてくれたのかもしれません。

十一月に出身高校で講演をする機会がありました。話の中心はロケットや宇宙開発でしたが高校生が将来を考える上で何かのきっかけになればと、技術系から事務系まで様々な若手のJAXA職員に作ってもらったビデオメッセージを流しました。「宇宙を仕事に選んだきっかけは？」という問いに「宇宙を舞台にしたアニメ漫画が好きだった」「川の水質検査をする授業で科学や地球の環境問題に興味を持った」「ケネディ宇宙センターの展示を見てカッコいいなと思った」など、現在JAXAに勤める職員がいろいろな宇宙との出会いでこの世界に入ってきていることを紹介しました。「みなさんが宇宙に興味を持って一緒に働くことが出来ると嬉

略歴

一九八九年三月 東京大学大学院修士課程修了(工学系)
一九八九年四月 宇宙開発事業団(NASDA)に就職
二〇一五年六月 基幹ロケット高度化プロジェクトチーム
プロジェクトマネージャ
二〇一九年十一月 鹿児島宇宙センター所長 現在に至る

しいです」という定番の締めにかけて「今日の話が宇宙を身近に感じてもらえるきっかけになれば」と付け加えました。講演後に生徒から「文系でも宇宙に関わることが出来ますか？」という質問をもらいました。JAXA職員の二割強は文系出身者であること、仕事を進める上で必要となる法律、国際調整、広報活動や民間企業との連携など文系出身者が活躍出来る分野は今後ますます増えてくると思うと回答し、講演から何かを感じてもらえたことと嬉しく思いました。

一九八九年に最初の赴任地として種子島宇宙センターに勤務して以来、出張や転勤で鹿児島とつくば・東京を度々行き来し、現在は三度目の勤務地として種子島に暮らしております。内之浦宇宙空間観測所にも訪れる機会は多く、私自身、一方的に鹿児島のことを第二のふるさとのように思っております。今年も鹿児島からロケットが打ち上げられます。いよいよH3ロケットもデビューする予定です。ロケットにはさまざまなミッションを託された探査機や人工衛星が搭載されます。ここ鹿児島を窓口を展開されるロケットの打上げを始めとする宇宙活動が、子どもたちの将来に夢と希望を与えるきっかけになればこれほど嬉しいことはありません。



新時代の学校教育に求められるもの

東昌小(市) 今村 浩 二

二〇一六年に「Society 5.0 (ソサイエティ5.0)」を政府が提唱したが、近年のAIやロボットなどの技術革新は確かにめざましい。そんな中コロナ禍によって社会(日常)生活は急激に変化した。学校教育でも過去例がない一斉休校措置がとられ、学校が右往左往する事態も生じた。これらのことにより、Society 5.0の到来がずいぶんと早まり、未だ経験したことのないこと、例えばリモートによる会議や授業の実施、三密を避けて実施する方法等、誰もが正解が分からない、やってみながら考えるなど、自分たちが早急に技術革新に適応せざるを得ない状況にある。

さて二十年ほど前になるが、当時の鹿児島市学習情報センターではSociety 4.0を見据え、ISDN回線でのテレビ会議や共同学習、遠隔授業を提案しており、今後の教育活動にも進化が必要だと発信していた。そして実際に市内学校同士や学校と平川動物公園や水族館、近代文学館等を繋いだりもした。しかし、情報機器活用自体が目的ではない、「コンピュータの向こうには人(相手)がいる」を一番大事にしながら、「昨日まで不可能だったことが今日は可能になる」楽しさを広げたらと考えていた。

では学校は民間と比べこの二十年間でどのように進化したのだろうか。今回長期間の臨時休業となった際に、「主体的に学習に取り組む態度」が自宅学習で発揮できたか、現在の授業・学力向上(狭義)のやり方で本当に身に付いていたかを検証できたのではないか。今後行政によつて早急に機器・通信環境等の整備が着々と進むだろうが、「目指す資質・能力」を育成できるリモート型授業例の提案には時間がかかりそうである。それを待つ間に再度起こったら……。

先日、北海道の振興局主催で北海道と鹿児島市立学校複数校で行うLIVE配信と交流に本校も参加した。ZOOM(アプリ)とタブレット(内蔵カメラ)、PCマイクを使用して行うことになっていった。残念ながらそのままで「授業」にはならないと考え、本校ではWebカメラとマイクスピーカーを準備して参加した。確かにICT機器と無料アプリを使えば誰でも画面を通して会話ができるがそれを授業と言えるか、ただの体験活動に過ぎないのではないか。もし現在の対面授業をそのままリモートで行った場合、対面の良さが制限されるため、これまで以上に教師の説明が延々と続き、主体的も対

話も深い学びからも大きくかけ離れた時間になる危険性がある。リモート「講義」であればそれでいいのかもしれないが、子どもの資質・能力を伸ばす授業を行うためには「新しい授業様式」が必要と分かっているのだが、これまで切実な必要感がない状況だったため、検証済みの授業モデルを見つけることはたやすくはない。ならば自らが試行と検証で「創り出す」しかない。

新しい授業様式を創り出すには、ICT機器やアプリについて知識や技能を身に付けることも必要だが、まずは新学習指導要領や教科等の特質、学び方の躰、望ましい学級経営など本質に立ち戻って論点整理することが不可欠である。小手先だけいじってもすぐ行き詰まる。もし対面とリモートの両方の授業様式を教師が使い分け可能になったならば、学校閉鎖中のリモート授業だけでなく、遠隔授業や他校との合同学習等のレパートリーも広がる。また地理的的人的デメリットが大きい複式や小規模校ではデメリットの解消や新たな可能性の発見にも繋がるだろう。ただしバーチャルだけでは人間性の育成の観点からは不十分である(リモートの継続により心的不安の増加の報告)ことから対面の場合はこれまで同様大事にすべきと考える。

大きな変革期の現在、働き方改革、後継者不足などの様々な課題も山積している状況であるが、「ピンチをチャンス」と考え、学校も行政もガチガチの固定概念の払拭に努め、一度原点に返って現代の状況や課題に即した思い切った方法を創り出していくことを提言したい。



内容は変えても目的は変わらない

高尾野中(北) 下園 伸 秀

一 はじめに

コロナ禍の中、全ての学校がその対応に苦慮されていることと思う。そんな中、多くの学校では学校行事も中止や縮小をされてきたのではなからうか。

本校でも、昨年度の卒業式を皮切りに、全ての学校行事を見直して、対策をとってきた。五月に予定していた一年生の集団宿泊学習と二年生の職場体験学習は中止した。三年生の修学旅行は一旦は延期したが、結局、県内での日帰り校外学習に切り替えた。

このように、生徒は教室以外での学習機会を大きく失うこととなった。

二 高中三大行事

本校では、体育大会と文化祭・合唱コンクール、駅伝競走大会を高中三大行事と呼んでいる。これらの行事の中で、生徒たちは学級や異年齢集団の団結力を高め、努力した結果が成果と現れ、その成就感を味わっている。

コロナ禍で、これらの行事も大きな見直しを余儀なくされたが、行事の目的を達成すべく、全職員でアイデアを出し合い、行事を行ってきている。その対応を紹介する。

(一) 体育大会

開催時間を短縮して午前中のみとした。

P T A 種目や学年種目等を削除し、プログラムの精選を図った。特に、学年種目は本校では伝統的に三年生が綱引き、二年生がムカデ競争、一年生が長縄跳び(「体力アップ! チャレンジかごしま」に準じて実施。昨年度は四学級の全てが一・二・五・八位と入賞)を継承しており、学級の団結の要の種目であった。何度も職員で話し合いを持ったが、結局どれもが生徒同士の密や接触を防げないと判断し削除した。

実施する種目でも工夫を凝らし、徒競走は直線での六十m走とした。

さらに、参観者も保護者と弟や妹のみに制限し、正門入口で受付を行った。

短時間で、参加種目も少ない中、生徒たちは実施できることに感謝し、精一杯の競技や演技を見せてくれた。

(二) 文化祭・合唱コンクール

文化祭では舞台発表を英語暗唱・弁論と文化系部活動の発表のみとした。

同じ日に行う合唱コンクールでは、体育

館の窓や入口を全て開けて換気を図り、歌う生徒たちはステージと体育館フロアも利用し前後の距離を離れた。鑑賞する生徒も体育館を全面使って間隔を広くとった。

参観者も保護者と弟や妹のみとし、自分のお子さんが発表する時のみ、二階席から鑑賞してもらおう入れ替え制にした。

生徒たちは朝や昼休み、放課後に練習を繰り返し、学級の団結力を高め、当日は素晴らしい歌声を聴かせてくれた。

(三) 駅伝競走大会

学級全員で三チームを編成し、学級対抗で駅伝競走を実施している。今年は例年より練習する機会を減らした。参観者は保護者と弟や妹に制限し、自分のお子さんが走る時間帯のみの応援をお願いしている。

大会はこれからであるが、当日は素晴らしい走りを見せてくれると信じている。

三 おわりに

全国的に感染者も増える中、学校でも感染防止対策の徹底を図ることで、学校教育活動は今後も常に変化を求められるであろう。

しかし、学校教育の目的は変わるはずがない。生徒は、教室での学習はもちろん、学校行事を含め全ての学校教育活動で成長していく。それらの目的を失うことなく、その内容は変わっても、教職員がいろんな知恵を出し合い、一致団結して、生徒を育てていきたい。

コロナ禍の今だからこそ、そんな学校経営に努めたい。



地域と連携した学校経営

「うみがめ留学生との関わりを通して」

岩岡小(熊) 郡山 正一郎

一 はじめに

岩岡校区は中種子町の南西部に位置し、細長い海岸線に沿った丘陵地に農耕地と山地とがあり、四つの集落に約百六十戸が住む。職業は、農業が主体で甘藷・さとうきび・稲作を主とした生産が行われている。海岸に面しているが、漁は自家用程度である。

児童数は減少傾向にあるが、地域住民のまとまりは強く、学校にも協力的で家庭と学校の連携もよくとれている。少子化による人口減少と高齢化が進む中、平成十四年度から留学制度を取り入れ、児童数の減少に歯止めをかけるとともに、留学生と地元の子どもの相互の教育効果を狙っている。児童の教育効果を高めるためには家庭の教育力の向上は必須である。この目的を達成するために、PTAが地域と連携しながら児童に岩岡校区の伝統を伝え、心豊かたたくましい子どもを育てることが不可欠であると考え、校区をあげて取り組んでいる。

二 「うみがめ留学生」の受入れ

中種子町では平成十一年度から「たねがしま里親留学制度」を実施しており、本校においてもこの留学制度を取り入れてきている。本年度で十九年目になり、これまで百十七人を受け入れてきている。受け入れについては、中種子町教育委員会に「うみがめ留学連絡協議会」を、各学校に「うみがめ留学実施委員会」を置いて活動している。岩岡実施委員会では、

三 外部講師の積極的招聘 ○ ウミガメ保護活動

毎月最終木曜日に里親会を開き、情報交換や行事等の計画確認などを行っている。メンバーは里親・学校関係者・PTA関係者・校長など十三人である。四月には歓迎会、地元の子どもたちとの交流を兼ねた遠足、屋久島旅行、ロケット打ち上げ見学など、年間を通して様々な行事が催されている。また行事はこれまで里親を経験された方々の支援や協力があったりして成立している。

学校の近くに長浜海岸がある。毎年、初夏になるとアカウミガメの産卵が始まる。夏休みになると孵化が始まり、海へと戻っていく。アカウミガメは絶滅危惧種に指定されている。学校には孵化場があり、海岸清掃をした後にアカウミガメの採卵から孵化、放流を実施している。地元のウミガメ監視員と連携をとっている。今年も種子島タートルクルーを招聘し、ウミガメについての話を聞いたたり、コストリカ共和国に青年海外協力隊として派遣された方からも、国外のウミガメの産卵について知ることが出来たりした。今後のウミガメ保護活動に役立つ内容であった。



○ 留学が縁で

現留学生は夏休みを利用して実親の元へ帰省しているが、夏休みの出校日になると元留学生が戻ってくる。近況報告をしてもらい、まるで同窓会のような。また、同様のことが、卒業時にもある。卒業生と同じ学年だった留学生が戻ってきて、卒業式で卒業の歌を一緒に歌うなど、とても感動的な場面になる。次は成人式で出会うことになる。成人式では卒業時や留学中に作成したタイムカプセルを開くことから始まる。九月になると大学生になった元留学生がアルバイトで戻ってきて、その友人の芸術大学の学生が音楽の時間にピアノリサイタルを開いてくれた。昨年の町PTA委嘱公開では「うみがめ留学」のことを話題にパネルディスカッションを実施した。パネラーとして元留学生の母親が遠方から参加した。



四

おわりに

「うみがめ留学」は卵を産みに種子島に戻ってくるアカウミガメのことから名称変更が行われた。留学生には何らかの形で種子島に戻ってきてほしいという願いが込められている。留学が終わっても留学生との関わりは終わりではない。再度種子島に住みたいと仕事を求めに来たり、留学生と地元の子が結婚したりして交流は続いている。また離島という地理的ハンディを少しでも克服するにはかねてよりアンテナを高く持ち、情報収集に努めいくことである。今後、学校のICT機器が整えばオンラインやリモート等での元留学生との取組も増やし、何より地元の子どもたちの学びに良い影響が及ぶことを期待しながら、児童一人一人に生きる力がつくように取り組んでいきたい。



一人の子どもを粗末にするとき その学校の教育は光を失う

羽月西小(始) 岩屋 高広

一 はじめに

本校は、伊佐市の南西部、出水市との境に位置し、標高二百三十一m、自然豊かで静かな環境である。冬季の冷え込みは厳しい。

本校区は、コミュニティ活動が盛んで、校区民のまとまりも強い。本校の教育活動においては、積極的な支援や協力をいただき、特に、校区との合同運動会や合同文化祭(黒豚祭り)は、大いに賑わう。

二 学校の教育目標

本年度、児童の実態を踏まえ、教育目標を「夢や目標の実現に向けて、心身ともにたくましく、自ら考え、豊かな表現力を身に付けた子どもを育てる。」に設定した。特に、自分の考えを積極的に発表できるように学力向上と関連付けながら、表現力の育成を重点課題として取り組んできた。

三 学習指導の充実と学力向上

(一) インクルーシブ教育の視点に立った指導・支援の研究・実践

平成三十年年度・令和元年度と地区の指定を受け、複式における学習指導と特別支援

「学校応援団」の積極的な活用により、専門的な指導など充実を図っている。さらに、高齢者の方々を中心とした「安全見守り隊」の活動は、児童の登下校の安全を確保する上で大きな役割を果たしている。

(三) 被災地支援のボランティア活動の充実

「干し柿プロジェクト」は、被災地である宮城県南三陸町へ干し柿を八年間送り続けた。震災十年目を迎え、本年度をもって終了することとなったが、本プロジェクトを通して、思いやり、協力など多くのことを育成することができた。

五 たくましい体力・気力の育成

○ 「たくましい、がごしまっ子」育成推進事業における研究の充実

令和二・三年度県の指定を受け、研究テーマ「運動する楽しさや喜びを味わい、進んで運動に取り組む西つ子の育成」を掲げ、子ども同士が関わりながら学ぶ「つなぎ」や学校・家庭・地域が子どもの目標を共有する「つながり」を中心に仮説を設定し、研究を推進する。

六 おわりに

伊佐市の教育の合い言葉として、大正・昭和時代の教育者、阿部清美先生の言葉より、「一人の子どもを粗末にするとき、その学校の教育は光を失う」が掲げられている。この言葉は、本校学校経営の基盤である。また、学校だけではなく、地域・家庭にもこの言葉を浸透させなければならない。今後とも、一人一人のよさを知り、個々の実態を大切にしたい指導を目指していきたい。

四 豊かな心を育てる教育の推進

(一) 人権同和教育の推進によるいじめや差別のない学校づくり

校内研修の充実を図るとともに、毎週木曜日の職員朝会后「なくそう差別 築こう 明るい社会」の読み合わせを教職員が輪番で行い、人権意識の高揚を図る。

(二) 地域を生かし、地域に根ざしたコミュニティ・スクールの推進



夢や目標にチャレンジできる 宝の子を育む (学校教育目標)

手打小(北) 馬場 勝博

一 はじめに

北薩の教育「良質な教育環境づくり」を推進する薩摩川内市「最西端は最先端」の気概に満ちた「甌島最南端」の小学校である。

元県教育長濱里忠宣氏が在籍された学校でもあり、同氏の記念碑が見守り続けている。

「ふるさとの子らよ
天の星のごとく
煌々と輝け」



二 本校の特色

「安心・安全」「見届けとつなぎ」を合い言葉に、一人一人の子どもに寄り添い、地域の負託に応える経営を目指している。また、子どもが輝くために、自己有用感の獲得・学力保障・業務改善の視点から、機動的な日課表の改編も実施した。【令和元年度より】

- (一) 職朝の廃止(諸会議統合・職員連絡会)
 - (二) SST創設(クラスタイム補充)
 - (三) 手打タイム・チャレンジタイム運用
 - (四) 文化芸術活動の担い手
- 三 子どもの輝き

(一) 心のエネルギー醸成

始業前から担任は、教室で静かに子どもたちを迎え、朝活動を経由して一校時に入る。一人一人の心身の状況を把握し、穏やかな一日の滑り出しを図っている。また、業間では毎日「職員連絡会」を設定し、業務連絡や子どもの情報共有の場としているため、Momの態勢が息付いている。

(二) コミュニケーション力醸成

学級・全校活動として、月二回の朝活動にSocial Skill Timeを位置付けてある。自他理解・仲間づくりを通して、自己肯定感や自己有用感を醸成させ、学級目標や学校目標に一体となって取り組む姿勢と気運が高まりつつある。また、教育的ニーズに応えるため、全ての子どもたちの個別の指導(支援)計画を作成し運用している。

(三) 学力保証

見通しを持たせた授業実践を積み重ね、ラスト十分の見届けと併せ、家庭学習とリンクした次時の導入にも取り組んでいる。思考の広がりや深まりを意識した指導過程を通して、個々の学習意欲は高まりつつある。また、ラジオ作文創作(手打タイム)や個別

(四) 感性の醸成

補充指導(チャレンジタイム)の実践で、個々の期待点の克服にも全職員で取り組んでおり、成果として定着度・全国学力共に地区・県を上回り子どもたちの自信となっている。



「来訪神：仮面・仮装の神々」として、ユネスコ無形文化遺産に登録された「トシドン」保有の地区として、伝承の踊りや唄に精を出す子どもの姿がある。また、新聞投稿や各種絵画作品等の取組も成果を上げている。ほとんどの子どもが上位入賞を果たし、学校賞も数回ある。特に長期休業中は校長室が創作会場となり、全学年が入り乱れて子ども同士の「指導・助言」が飛び交う様は、頼もしい限りである。

四 おわりに

子どもたちは、始業前の体力づくり(一輪車等)に取り組み、年二回実施される体力テストに向けて、目標を持った活動の姿がある。「チャレンジ鹿児島」にも幾つか入賞しているようだ。昼休みは、職員と共に歓声を上げて走り回り闊達な命の漲りを感じる。そして、この子どもたち一人一人の輝きは、職員一人一人の輝きがあつてこそ結実していると感じる。

素敵な全職員に感謝である。「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」再び巡る事のない人生の一節を謳歌させたい。



生徒主体の実践型カリキュラム

野田女子高 下園 聡

一 はじめに

はるかに広がる紫尾の山並み、三百メートルトラックを設置する緑の校庭、肥薩おれんじ鉄道の野田郷駅舎など、本校の教室から一望できる風景は、広大な冬空を飛来する出水の翼たちとともに、生徒たちの学校生活を鮮やかに彩ってくれている。

本校は、出水市野田町に位置し、家庭科と看護科を専門的に学ぶ県内唯一の県立の女子校である。まずは本校をよく表現した校歌の一節を紹介したい。

「悠久の翼棲む田園 看取らばや 若人われら生活の知性 聴く修め 創り作す 力ある指まで 青春青春美しき 野田女子高校」

二 コロナ禍で

令和二年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、医師・看護師をはじめとする医療従事者の方々や、食品や生活必需品を提供される方々、子供たちの感染症対策に悩まされた保育園や児童クラブに従事される方々など、その献身的な社会貢献に注目が集まった。

本校に設置された生活文化科（服飾類型・保育類型）・食物科・衛生看護科・専攻科のカリキュラムをこのような状況下で改めて見直してみると、まさに、生活の基本的な衣食住や保育、看護・福祉等、日々の暮らしに直

三 実践的な学習を中心に

令和二年度産業教育審議会（本県公立高校における産業教育に係る諸問題について調査・審議していただく機関）において、産業界や学識経験者を中心とする審議委員の方々から、「学校での学びを社会で生かすためにも、実習等により、実践的・体験的な学習を行うことは、将来仕事を行う上で重要である」という提言をいただいた。本校では臨地実習や外部講師の先生方の授業など、「より社会に近い」形で実践的な授業がカリキュラムの中心に据えられている。各科でのインターンシップ、長期にわたる病院や施設での看護臨地実習、ホテルや割烹など各方面で活躍される料理長を講師に迎え毎週実施される調理実習、出水市の社会福祉協議会と連携した年五回の「子どもの森」保育実習、また、鹿大の医師講師や個人病院の院長の方々を招いての日々の講義等、七十名を超える外部講師の方々に来校いただき、社会貢献も含めた専門職のあり方を生徒たちは生きた教材として学ばせていただいている。

四 独自のカリキュラム

本校の教育課程は、文部科学省と、看護師や調理師の資格取得につながる厚生労働省のカリキュラムとの学習活動が両輪であり、専攻科を有する点からも公立高校としては全国的にも類をみない特徴的な専門高校である。各科オリジナルティーに富み、生徒は自らの資格取得と将来を見据え、目標をもち毎日の学習に取り組んでいる。家庭科や看護科の特性上、その学ぶ分野は、消費者教育や主権者教育、がん教育や薬物・性教育等、多岐にわたり、地歴公民や理科、保健体育等との教科横断的なカリキュラムや、本校の実践的な学習を活かし地域や社会との連携をさらに充実させたカリキュラムの構築を、今後さらに深めたいと考える。

五 おわりに

本校では実践的な学びと併せて、普通教科においてもアクティブラーニング等、生徒の主体性を引き出すための授業構築を模索している。今後、本校の特徴をいかすために新学習指導要領をいかに実践していくか、特に生徒主体の生き生きとした授業づくりのため、「カリキュラム・マネジメント」への取組に大きな可能性を感じている。



【実習風景】



「自発性は活動の成果でもある」

住用小(大) 久 永 浩 幸

若い頃、朝の清掃作業のことで悩んでいた。朝学校に着くと、子どもたちが早くから学校周辺の掃除をしている。実にはすがすがしい朝の光景だ。そんな子どもたちから「おはようございます。」と声をかけられるとなおさらである。しかし、中には外に出ているが話ばかりしている子ども、参加すらしない子どももいる。こんな時、優しく声をかけ、師弟同行となれば、お互い気持ちのいい朝を過ごすことができるのだが、現実はどうもそううまくはいかない。困つてしまい、同僚の先生に、どうすればみんなが参加できるようにするのか聞いてみた。だが、方法というより、何か先生の見えないオーラが働いているように思えた。強制的にやらせるとやる気を失うし、自発性に任せると決まった子ども

けの活動になってしまふ。そのため、朝の作業で逆にいやな一日が始まっているなど感じることも多かった。この頃は、「みんなに」ということと、朝の作業は時間外だし「自発的にやるものだから」という呪縛にかかっていたのである。

そんなある日、知り合いの先生にこの悩みを話したところ、面白い話をしてくださった。

「自発性が先か活動が先かなんて、なんだか鶏と卵の話みたいだね。自発性が活動の要件だと思っているようだけど、活動の成果でもあるんだ。」と。大人と一緒に活動をして活動の必要やららせていると、子どもにもその活動の必要性や面白さ、やり方などが次第に分かってくる。また、どんな行動が今望まれているのかということにも気付くようになる。そのうち、人から言われたことでもないのに、自分からやってみたくなる。その行動が人の役に立っていると感ずるとなおさらだ。これが自発性。その心地よさを子どもたちに味わわせようと、学校では様々な奉仕活動を意図的・計画的にさせているんだと。どうやって参加させるかばかり考えていたが、「気持ちがいいからやる。」という本来の目的に改めて気付かされた気がした。

「永遠の新人であれ」

山川中(南) 中 村 恵 子

三十六年前、今はもうありませんが伊敷にあった鹿児島西高等学校の体育館で行われた初任者研修の時の、鹿児島県教育長濱里忠宣先生が述べられた言葉である。新人は、初任はたった一年で終わるが、それに「永遠」が付けば常に新人なのだから、今日のこの初任研の時の気持ちを忘れることなく、鹿児島県の子どもたちのためにしっかりと勤めてほしいとエールを送っていたのだ。その後、何台もの大型バスで研修センターへ移動し宿泊研修を受けたことは憶えているが、どのような活動や指導があったのかは全く憶えていない。ただ、この「永遠の新人であれ」という言葉は私の教育者としての根幹にずっとあったのではと思っている。

桜が満開の中赴任した初任校、初めて任せられた校務、担任、部活動顧問、本当に新人で失敗を繰り返していた日々だった。それから現任校までの十校、新しい赴任地でこの言葉を思い出しスタートを切ってきたのだった。

しかし、中堅となった頃、仕事について慣れてしまふ前年踏襲で済ませたりする自分がない。目の前の生徒たちに対してもである。そんな時に限って、そう「永遠の新人」を忘れた時に限って、生徒や同僚や保護者と大きなトラブル

ルを起こしたり、大きな失敗を挫折を後悔を繰り返してきたように思う。

そして、教頭職を拝命した時、県立小中学校女性管理職研究協議会から新任教頭として原稿依頼を受けた。まさしくリスタートの時であると思ひ「永遠の新人であれ」と執筆した。教諭時代とはまた違う多くの出来事、失敗、苦勞があったが、その度にこの言葉を思い出し、リセットして今に至っている。

これまで多くの生徒との出会い、多くの先輩方から御指導をいただき、また、保護者や地域の方々からの応援があったからこそ、無事今まで勤めることができたと感謝している。そして、何よりこの言葉をくださった濱里先生に感謝し、これからも大切にしていきたい。

経験から学ぶこと

帖佐中(始) 北 英一郎

教職生活三十五年目を迎え、今までの職場での出来事を振り返ると、懐かしくもあり、恥ずかしくもある。教え子たちには感謝の言葉しかない。教諭、行政職時代は、学級担任、教科等

の授業づくり、研究公開、部活動指導、生徒指導、学校行事の運営、中体連地区大会の運営、企業研修、接遇研修、事業の企画・運営、文書作成、関係機関との調整など様々な経験をさせてもらった。教頭時代は、管理職として、校長を補佐し、学校経営に携わったが、学力向上や生徒指導などの校務運営、職員指導など、どこから手をつけてよいか分からない状況だった。県や地区、市の研修会では多くの課題が示され、整理しきれず悩んでいた時、教育長の「一点突破、全面展開」という言葉から、学校の課題を整理し、重点を明確にすることの大切さに気付くことができ、一つ一つの課題と向き合い、組織を動かす、学力向上や生徒指導、PTA活動などに前向きに取り組むことができた。

今、校長をさせていただき、日が経つにつれて、学校の現状と課題が明確になり、生徒、保護者、地域の方々の期待を肌で感じ、責任の重さをひしひしと感じている。学校を経営するということは、全ての教育活動を通して、「自立した生徒」を育てるために、日々の教育活動を充実させなければならない。このことを達成するために肝に銘じていることは、教育長から指導された「鶏を追うような周到な学校経営」である。学校発展のためには、学校経営方針、ブランドデザインを教職員や保護者、地域の方々に示し、学校、家庭、地域の状況を細やかに把握し、対策を立て、根気強く、継続して課題解決に取り組まなければならないと考えている。

今まで様々な校務や職を経験し、自分なりに力量を身に付け、積み上げることができたと思う。また、生徒の成長する姿、上司・先輩の指導・助言、同僚の支え、保護者や地域の方々の協力によって、人間として、社会人として、教師としての自分があるのだと思う。挑戦する気持ちを持ち、今を精一杯生き、立ち止まることなく学校経営に取り組んでいきたい。

「管理職は二人やつでな」

第一佐多中(隅) 大 脇 和 久

「教頭さん、管理職は二人やつでな。何かあつ時は呼んでくいやいな。」私が、K中学校の教頭をしている時に、I校長先生から指導を受けた時の言葉である。問題行動を起こした生徒とその保護者を、勤務時間外に召喚し指導終えたことを次の日の朝一番に報告に行った時の事である。それまで仕えてきた校長先生方は、同じ事をして、「ありがとう。」と喜んでくださった。夜も遅く、できるだけ校長先生に気苦勞をかけたくないという配慮をしたつもりであった。教頭は、校長先生に応じて対応を変えなければならぬということ学んだ出来事であったが、

何よりも嬉しかったことを鮮明に覚えている。

I校長先生は、何事も教頭へ丸投げではなく、一緒に考え、悩んでくださった。私が忙しい時には、優しく声をかけて手伝ってくださった。そして、教頭や職員が失敗しても、最後の責任は校長自ら取ってくださいました。学校で一番多忙であるのは教頭であるということを十分に理解してくださいっており、よく職員の前で私の労をねぎらってくださいました。I校長先生の功績を周りから聞くことはあっても、自分から自慢げに話されることは一切なかった。謙虚で、後ろ姿で多くの事を学ばせていただいた。私がK中学校を転出する際には、「これからは、上司と部下ではなく、一対一の人間としての付き合いをしていきましょう。」と言ってくださり、涙が止まらなかつたことを思い出す。

I校長先生は退職されて二年目になるが、現在でもお付き合いをさせていただいており、年に二回ぐらいいは酒を呑みながらK中学校時代の思い出話に花を咲かせている。

私は校長三年目になる。I校長先生を理想として学校経営を行っているつもりではあるが、まだまだである。教頭職は激務である。それを不平不満も言わずに頑張ってくれている教頭先生に感謝しつつ、管理職として二人で力を合わせて、生徒のため、職員のため、学校のために尽力していきたいと考えている。

ある日の校長講話



「戦争と平和」

清和小(市) 宇都 修

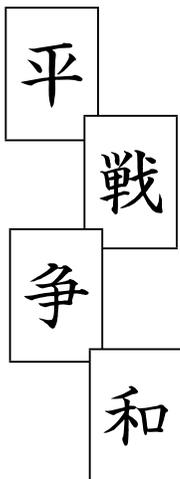
新型コロナウイルス感染症の影響で短くなった夏休み。出校日の八月二十一日、テレビのモニター越しに児童に向けて話した内容の一部である。

これから四つの漢字を出します。一年生や二年生はまだ習っていないと思いますが、何となく好き、何となく嫌いでいいですから漢字をよく見てくださいね。一枚目は、「平」(間)これは「へい」と読みます。たいらとかひらたいという意味です。次は、「戦」です。たたかうとなります。次は、「争」であらそう、けんかに近いでしょうか。最後は、「和」です。仲良くすることですね。

さあ、皆さんはどの漢字が好きですか。私は、「平」と「和」を選びました。今、私たちが住んでいる日本は平和ですね。みんなも「幸」を感じていると思います。七十年以上も前になりますが、日本は戦争をしていました。この時代は、「幸」の上に「不」という漢字がついていました。そう、「不幸」です。

日本が戦争をやめた日は、八月十五日でした。テレビや新聞で戦争のことを見たり聞いたりした人も多いと思います。夏休みも残り十日ぐらいいになりましたが、世界中から戦争をなくし、どうしたらみんなが幸せに暮らしていけるのか考えてみてくださいね。

※ 平・戦・争・和・幸・不の漢字六文字で構成した出校日の全校朝会講話



漢字から学ぶこと

南小(隅) 別府 浩

今日は、漢字の形や意味についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。みなさんは、漢字を覚えるのが得意ですか。校長先生は、子どもの頃に漢字を覚えるのがとても苦手でした。特に画数の多い漢字は、覚えるのにとっても苦勞したものでした。

さて、ここに二つの漢字があります。(幸と辛のパネルを示す) この二つの漢字は形が少し似ていると思いませんか。そうですね。「辛」の上に「十」がついて「幸」になっているように見えますよね。ところで、世の中は、決して楽しいことばかりではありませんね。時には辛いこともあります。もしかしたら、楽しいことより辛いことの方が多いかもしれません。でも辛いことばかりではないと思います。この漢字のように辛いことも十回くらい必死に頑張つて努力を続ければ、やがて幸せに繋がるのだということを表しているのではないのでしょうか。毎日の学習や運動も同じことが言えますね。苦手なことは辛いものです。でも、苦手なままでは

ずつと辛いままで。努力は必ず報われるものと信じて日々の生活をおくりたいものですね。

もう一つの漢字は「愛」です。みなさんの身近な愛といえば「家族愛」や「兄妹愛」がイメージされると思います。ところで、この「愛」の漢字の中には二つの漢字が隠されているのですが、分かりますか。そう、「心」と「受」です。受け止めるという漢字の中に心が入っていますね。どんな意味が隠れていると思いますか。(少し考えさせて) そうですね。お互いに心を受け止め合うことで愛が育まれるという意味でしょうか。みなさんのお父さんやお母さん兄妹やおじいちゃん、おばあちゃんと心を受け止めて合っているから家族愛という愛で繋がっているということですね。これからも家族を大切にしたい、互いに心を受け止め合ってほしいと思います。漢字一つでもいろいろなることを考えさせられますね。他の漢字も調べてみてください。

広い視野を持ち、郷土を考える

龍北中(大) 志風 寛

先週、学習発表会が終わりました。今年は、新型コロナウイルス感染症対策のために參觀者は保護者を中心にわずかでしたが、一生懸命に練習や準備に取り組み、大成功に終わらせることができたことをとてもうれしく思います。

島ユムタ劇『わきゃシマ』は、六月の取材活動から始まり、長い時間をかけて完成させました。公民館で集落の方に昔の島の生活について取材をしているときに、「将来、島で生活したいか、それとも島を出て生活したいか」との話題になりました。皆さんの答えは、「島で生活したい」「島を出て生活したい」「一度島を出て、また、島に戻ってきたい」「今はまだわからない」などさまざまでした。「わきゃシマ」は、島を出て都会に暮らしている主人公が、帰省をきっかけに島で生活することを決心するという劇でしたが、実際に、将来、進学や就職、具体的な夢や目標ができたときに、考える必要がでてくるかもしれません。

奄美にイターンする方はたくさんいます。先

日の歯科講話で話をしていただいた歯科衛生士の方もそうでした。サーフィンが趣味で移住したそうです。講話の後、校長室で奄美の魅力を語っていました。以前住んでいた場所と比較することで、奄美の素晴らしさに気づいたのだと思います。また、『わきやシマ』の主人公のような場合にも、比較することで魅力が分かると思います。しかし、ずっと奄美に暮らしている場合は、当たり前にも思っていることが実はとても貴重なことに、気づいていない場合があるかもしれません。その意味で、郷土について学習することは、とても大切なことだと思います。

龍北中は、郷土や環境についての学習を大切にしていきます。奄美の素晴らしさに気づき、奄美を誇りに思えるためには、郷土のことを学習するとともに、広い視野をもち、世界や地球を考える視点が大切だと思います。新聞やテレビ、ラジオ、インターネットなどを通して、たくさん情報を得ることができます。興味を持って世界のことや新しいことに目を向けることが、郷土についての理解を深めることにもつながると思います。

※島ユムタ劇Ⅱ島の方言を使った劇



初代校長

平原 篤信

福山小(始)

赤塚 明人

校長室に入ると、歴代の校長の写真が掲示してあるが、本校の初代校長の写真はない。ただ「第一代 平原篤信

明治五年四月〜明治九年三月 福山町福山出身 明治十年西南の役で延岡において戦死」と墨書して掲示してある。

なぜ初代校長が西南の役で戦死しているのか不思議に思った。当時の様子を福山町郷土史で紐解くと、薩摩と福山の郷中教育は、深いつながりがあることが分かった。福山港は、島津藩主や要人が日向下向の際には必ず立ち寄る場所であったため、青少年教育にも大きな影響を与えていた。そのため、早くから福山には寺子屋や塾が設けられていた。

平原氏は頭脳明晰な人で、行動力があつた。当時、「社会生活を営み国家有為の人物となるには教育ほど偉大なものはない」という信念を

持ち続けた人である。その頃は、まだ師範学校出身の教師がいなかったため、大川謙治氏(第二代校長)をわざわざ肥前唐津から呼び寄せた。また、市成、百引、恒吉、岩川、財部、敷根、清水等に自ら遊説に出かけ、教師の獲得に奔走している。そして、福山を始め近隣の村々に教育の必要性を説き、経済的に苦しい家計のところは、自宅に引き取って勉学に勤しませた。ちなみに創立当初に福山小学校に入学したのが、旧制福山中設立者であり、旧田中家別邸で有名な田中省三氏(西南の役に参加)である。田中氏の入学は、平原氏が田中氏の両親を説得して、寺子屋から福山小学校へ編入学させたという経緯がある。その後、彼は鹿児島師範学校一期生として入学し、卒業後、福山小学校の教員として働いた。

明治十年西南の役が起こると、西郷隆盛を尊敬・師事していた平原氏は、福山隊二百余名を率いて参加し、明治十年八月十三日延岡熊田村にて川を渡るとき、政府軍の弾丸に当たり戦死した。享年四十一歳であった(敬天愛人第三十五号に掲載)。

郷土史には、「これ平原篤信こそ教育の権化であった。この人こそ教育碑を建設しても恥ずかしくない人である」と謳っている。

思いを寄せる

ということ

薩川小(大)

下 蘭

聡

脳腫瘍の手術をした。十一年前のことである。その年たまたま脳ドックを受けたところ腫瘍が見つかった。医師がCT画像を見ながら、特に問題はないですねと言っていたのだが、ある角度からの画像を見たとき言葉が途絶えた。もう一度MRIを撮りましようと言われて撮った画像には縦3cm、横6cmほどの腫瘍が左脳を押し潰すように鎮座していた。それまで自覚症状は全く無く、まさに青天の霹靂であった。幸い良性であり、命に別条はないだろうとの見立てであったが手術を受けるまでの二か月間は、ついついネガティブな思いに囚われていた。九時間の手術も無事に済み、翌日から手術前と同じように生活できることが不思議だった。脳の手術ということ、術後は重症者のような入院生活になるのではと勝手に思っていたのである。これには些か拍子抜けすると同時に医療技術のすごさを身をもって実感した。術後三日までは医療用ホチキスで五〇針以上打ち込まれた、まるでフランケンシュタインみたいな自分の顔を見るのが憂鬱だったが、それも医師がまるで紙から外すように取ってくれた。二週間ほどで退院し、一か月で職場に復帰した。

その間、たくさんの人にお世話になった。

やはり何と言っても、懇切丁寧に説明し不安を拭ってくれた主治医の先生、笑顔で励ましてくれる看護師の皆さんには手術に臨む心を整えてもらった。

新型コロナウイルス感染症が拡がり続けている今日、医療現場でまさに体を張って治療に当たっている方々のおかげで救われた命がたくさんあるはずだ。医療従事者や感染者を差別したり、偏見の目で見たりする人たちは自分が感染した時にどのように彼らに接するのだろうか。懸命な治療により、自分の命が助かった時に過去の自分をどのように振り返るのだろうか。言わずもがなである。無責任な言動はやがてブーメランの如く我が身に降りかかる。

では、道徳や特別活動を中心にすべての教育活動の中で人権尊重や思いやりの心を育てているはずの私たちは、更にもどのような教育活動をしていけばいいのだろうか。解は一つではないが、相手が子供であれ大人であれ、まずは思いを寄せることからしか始まらないだろうと思っている。



〇〇を未来とか

言ったのは誰だ

南薩養護学校

鶴 田 弘 文

三太郎が登場するシリーズCMのキャッチコピーである。高速通信技術が身近になり、少し前まで「未来」と思われていたことが実現したことを伝えている。学校教育においても、このキャッチコピーと同じような感覚を覚える。

約二十五年ほど前、勤務していた奄美大島の瀬戸内町の小学校では、テレビ会議システムを導入して町内の四校と県総合教育センターの五地点を接続する高度情報通信設備(マルチメディア)活用の研究事業がスタートした。

四年生の二校接続授業で、私の勤務する学校の四年生は一学級三十人以上の大規模校。一方、与路島の小規模複式学級では、四年生はT君一人だけであった。光ファイバーケーブルに接続した当時の最先端機器を用いた国語の授業で、T君は生まれて初めて自分の同級生の朗読を聞き、自分の発表に友達から大きな拍手を受けた。離島へき地の学校でのマルチメディア導入を喜び、その技術にも驚いた。しかし、授業が終わりに、学校間の接続を切ると、モニターの右下には接続時間と同時に通信料として一万円を超える驚くような金額が表示された。

当時は、マイクロソフト社のウィンドウズ95が発売され、技術の進歩を感じながらも、高額

な通信料に驚き、多くの学校で日常的に活用できるのはまだまだ先の「未来」のことにように感じ、ため息をついたのを覚えている。

現在、勤務する特別支援学校では、児童生徒がタブレット端末を使って与えられた課題に対する情報を収集し、体育の授業では遅延ビデオ機能カメラで自分の動きを確かめたり、学習のまとめでは、動画や写真を使って学びを振り返ったりしている。もちろん校内のネットワーク整備により通信料が発生する心配もない。

気が付けば、現在の私は、奄美大島の学校で少し遠い夢のように感じていた「未来の学校」に勤務しているようである。今後、GIGAスクール構想により、児童生徒一人一台の端末と高速通信ネットワークが整備される予定である。そうなると、現在想像する「未来」も、意外とそう遠くない未来なのかも知れない。



読書案内



■司馬遼太郎 著

人間というもの

浮辺小(南) 中島睦朗

私は、司馬文学ファンの一人である。テレビドラマにもなった「竜馬がゆく」や「翔ぶが如く」、「坂の上の雲」等の歴史小説、「街道をゆく」をはじめとする多数のエッセイなど数多くの作品があるが、今回は、それらの中から、司馬文学の魅力を凝縮した「人間というもの」を紹介したい。

本書は、司馬遼太郎の作品群から、「人間とは何か」「日本と日本人」「等身大の英雄たち」等のテーマを掲げ、選りすぐりの味わい深い文節・台詞を濃縮した一冊となっている。

例えば、「才能と仕事」の項では、「人には得

手と不得手がある。英雄にも愚者にもそれがあ。それを見ぬいて人の得手を用いるがよい。また人にはかならずいやなところがある。たとえば残忍、欲深というのはひとのいやがるところであるが、そういう人物ですら長所があり、それを親切に見てやらねばならない」(『世に棲む日日 一』より)という松陰の言葉や「仕事というものは、全部をやってはいけない。八分までいい。八部までが困難の道である。あとの二分はたれでも出来る。その二分は人にやらせて完成の功を譲ってしまう。それでなければ大事業というものはできない」(「竜馬がゆく 八」より)という竜馬の言葉がある。これらは、司馬氏の創作なのであるが、「この二人ならきつとこのようなことを言ったのだろうなあ」と妙に納得してしまう。

司馬遼太郎の作品には、彼のもつ類稀なる観察力によつて捉えられた、日本人社会を生き抜く心得が練り込まれている。本書は、彼の人間というものの捉え方が表現された部分を抜粋している金言集でもある。私は、折に触れて何度も読み返している。学校経営のヒントになることも多い。是非御一読いただきたい。

P H P 文庫 五五五円

徳川家康全二十六巻

内之浦小(隅) 永 峯 光 朗

若い頃から、繰り返し読んでいた本である。若い頃の感想、中堅教員の頃の感想、管理職になつてからの感想が違ってくるから、何度読んでも新しい発見がある本である。

主人公の徳川家康の生母・於大の方の縁談から、家康が亡くなるまでの七十余年が描かれている。単行本二十六巻は読み応えがあり、ついつい読みふけてしまう魅力がある。

インターネットで著者・山岡莊八を検索すると、第二次世界大戦中、従軍作家として多くの特攻隊員取材した経験があつたそうである。その際に触れた世界平和への祈りを胸に秘めて散つていった彼らの思いを、徳川家康の欲した「泰平」に重ね合わせて描こうとしたそうである。また、連載を終えた後書きを、自邸内に設けた特攻隊員を祀る「空中観音」小堂で書き記したそうである。改めて読み返してみると、この思いが作品の中に随所に盛り込まれていると感じさせてくれる。

作品の中では、織田信長、豊臣秀吉、明智光秀などとの出会いと駆け引き、人質時代に教育した雪斎禪師、徳川四天王と呼ばれる家臣団や

影で支える熊の若宮、商人・茶屋四郎次郎、刀の研ぎ師・本阿弥光悦、後の天台僧正となる随風などとの心の交流も、私の学校経営に大きく影響を与えてくれている。

また、この時代、弱い立場である女性たちも、平和のために男達に立ち向かう姿が描かれていて興味深く読むことができる。

家康の祖母華陽院、家康の母・於大、前田利家の妻・芳春院、秀吉の正室・北の政所、細川ガラシヤなど女性の活躍が描かれている。

全巻を通して、戦乱のない天下泰平の世を作ろうと懸命に努力し続ける揺るぎない家康の姿は、自分自身の生き方に大きな影響を与えてくれている。また、「人の一生は、重荷を負うて遠き道をゆくがごとし。急ぐべからず。」「願いが正しければ、時至れば必ず成就する。」など、今に残る名言も学校経営に大きな影響を与えてくれている。

講談社 八一四円



「感動は心の扉をひらく」 しらくも君の運命を変えたものは？」

河頭中(市) 西 光 久

子どもたちには是非紹介したい本である。人は誰しも、生きていく中で「自分はだめだ。」と自信を失ったり、他人と比較して劣等感を感じたりすることがあると思う。中学生や高校生の多感な時期では、特にそうである。しかしながら、一方で、自分の良いところや得意なものも必ず持っている。人それぞれが持っている才能にふたをする一番の方法は、「おれはだめだ」という気持ち、つまり劣等感を与えることだと掠先生は語る。では、劣等感でふたをされた才能を引き出してくれるのは何だろうか？その一つのかぎが、「感動」だと掠先生は述べる。そして、この本の副題『しらくも君の運命を変えたものは』、実はたった一冊の本との出会いである。同窓会で三十年ぶりに再会した「しらくも君」は『おれはなあ、頭にできものができていたというので、みんなからばかにされ、のけものにされた。』その彼が、四十歳を過ぎてから一冊の本に出会い、感動して、人生が変わったという実話。そんな「しらくも君」の運命を変えた本とは？・・・この続きは、是非この本

を読んで欲しい。

「感動というやつは、人間を変えちまう。そして奥底に沈んでおる力をぎゅうつと持ち上げてきてくれる。そういう性質を持つてゐるんです。われわれは何回も感動を受けては、心の中の火を大きくして、感動を受けるたびに心を変えて、人間を変えていく、そういうことの繰り返しによって、何か知らんが、その人間の持つておる力が出るのじゃないだろうか。潜んでいる力が出るのじゃないだろうか。若き日に大きな感動を受けた者は、私は幸せなるかなと思う。」

「人間というのは、何に出会い、何に感動するかということが大事だね。特に、本の感動というやつは大きい。」と、椋鳩十先生は、この本の中で語っている。本との出会いの素晴らしさ、そして、感動を原動力として可能性を引き出して欲しいと語りかけている一冊である。

あすなる書房 九三五円



■伊勢雅臣 著

「世界が称賛する 日本の教育」

鹿兒島商高 眞 田 俊

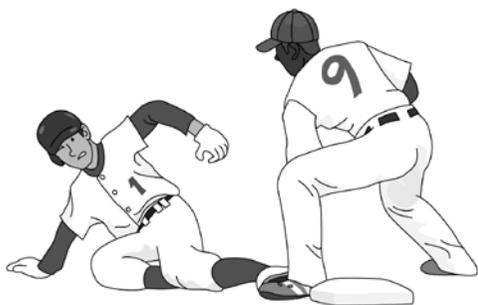
タイトルの「世界が称賛する日本の教育」と帯にある「グローバル化時代の日本の教育」が気になり、学校運営の参考になればと思い、手に取った。読み終えた後、誇らしい、何とも言えないすつきりした気分になり、改めて日本とは何か、日本人とは何かを考えさせられた。戦前の教育はすべて悪と断罪する価値観とは違い、国際的な視点からの日本教育の姿が見えてくる著作である。

豊富な海外勤務経験をもつ国際派の筆者は、日本の伝統教育がいかに立派な人づくりをしてきたか、多くの事例を挙げて紹介している。青年海外協力隊としてウガンダの高校に赴任し、野球部を指導した中学教師。彼がウガンダの高校生に求めたのは早朝の読書と清掃、時間を守ることに挨拶という日本式躰。一年後日本の支援で親善試合に招かれた彼らの日本人以上に礼儀正しくひたむきなプレーに大歓声が起こり、彼らは「ウガンダ・ジェントルマン」と讃えられた。このほかに「教育勅語」が意外にもアメリカ・レーガン政権下で評価されたこと、江戸時代の寺子屋制度により明治の教育水準が当時

の欧米に比べて極めて高かったこと、また文部省唱歌が日本人の情緒を育んできたことなど、日本の伝統教育の素晴らしさをつぶさに紹介している。筆者は、「戦前の教育や先人たちの智慧にも謙虚に学ぶ点があり、今日の日本があるのは無数の先人たちのお陰ではないか。」「国家百年の計は教育にあり。」と述べている。

海外勤務で筆者を支えたのは母国日本の根っこの部分であった。グローバル化時代を生きる子供たちにどのような教育が必要か大いに参考になる著作である。日本の伝統教育から学ぶべきものも多く、日本人としての美德（礼儀正しさや勤勉性、不屈の精神や助け合いの精神など）を子供たちにどのように伝えていくか、考えさせられる著作である。

育鵬社 一五〇〇円



中型のバイクで阿蘇の高森町周辺をツーリングしていたとき、偶然、草原をサラブレッドの親子が駆け巡っている乗馬クラブに出くわしたのが大学一年生の時であった。一時間ほど遠巻きに眺めていたのだが、クラブのオーナーが近づいてきて、「乗ってみないか。」と声を掛けられて以来、三十六年間乗馬を続けている。最初こそ馬場の中でジョグ（歩き）程度で馬が行きたいままに乗せられていた自分がいた。その時、オーナーから「自分の意思で馬をコントロールしてごらん。」と発破を掛けられた。そこから馬との真剣勝負となった。手綱一本で何とか動かそうとする私と、全く動かない馬。しかし、オーナーが馬に乗って近づいてきて、軽く口笛を吹いたら、僕が乗っている馬が自然とオーナーの馬の後ろをついていくではないか。そして、そのまま一般

趣味・文芸

校長室の文鎮の代わりは、全て愛馬の蹄鉄

中種子中(熊) 山下 信久

係を察する動物である。一般的に、馬の耳が騎乗している人の方を向いているときは、人を信じている証である。反対に、馬の耳が前方を向いているときは、人を信じられず自分で外部情報を収集して自ら行動しているときである。また、馬は手綱だけで動かすのではなく、乗っている人の声や口笛、跨いでいる足での締め付け具合などとても奥が深いものである。また、乗馬する前後のコミュニケーションも重要である。人は馬と接するとホースセラピー的な感覚にもなる。とにかく癒される。教頭時代、家庭教育学級で大型バス二台を貸し切り、宮崎との県

仲間はお互いウエスタンネームを持っており、私の場合も少なくとも九州管内では本名ではなくウエスタンネームで通っている。もつと言うならば、私の本名や教職の仕事をしていると知っている人はほとんどいない。自分もしかりで、三十年以上の仲間でも、今でも本名も職業も知らない人が多い。そう、本当に馬を愛し、馬の魅力に取り憑かれた人同士の集まりであり、それ以上でもそれ以下でもない関係が維持できているのである。だから、乗馬をしているときだけは仕事のことも忘れて、暑い真夏の日も雪が舞い降りる寒い日も馬に乗るのである。

特に寒い雪の日、乗馬をした後に超アメリカンなコーヒーを飲むときは至福のひとつである。

昨年、新任校長として、ここ中種子中学校に着任して驚いたことが

道路を散歩することとなった。途中、二階建ての大型観光バスが横を通りかけたとき、バスに乗っている観光客の要望だったらしく、空き地にバスを止めて窓から多くの人が手を振ってくれたり、バスに近づいたら握手をしてくれたり、何よりも衝撃的だったのは、アイスクリームを手渡しでもらったことだった。そう、馬に乗っている私の地面からの位置は、二階建てバスの二階席の人と同じ高さだったのである。改めて、馬に乗ったときの視界の高さ、広さを実感した瞬間であった。

馬は賢くて、人が鞍に跨がった時点で主従関

境のウエスタン乗馬クラブに連れて行ったことがある。みなさん、「キヤーキヤー」と言いながらも心癒された時間であったようだ。

二つめの魅力としては、ある程度の技術を身に付けると、阿蘇の大草原や川の中、また鹿児島では吹上浜などをキャンター(駆け足)やギャロップ(全速力で走る)で駆け巡ったり、山の獣道を走りながら大きな倒木を飛び越えたりするのが爽快である。時には鎧兜を着けて武者行列の先頭を闊歩したり、放牧場で牛追いをしたりして、仲間との絆を大切にしている。

三つめの魅力は、意外かもしれないが、乗馬

ある。それは、校訓「風に向かって立つ」である。これは、かつて馬の飼育が盛んであった種子島の「よか馬は、風に向かって立つ」ということわざに由来している。強い風(困難)に直面しても、自らを奮い立たせ、最後まで粘り強く取り組む生徒を育てることを目指している。校長室には、校訓と共に水墨画で描かれた勇ましい馬が風に向かって突き進む掛け軸が面前に掲げられている。なんと馬を愛する私にぴったりの空間である。

最後に、懇意にしていたいでいるオーナーは七十歳である。みなさん、今からでも是非。



さるつきゃんせ郡山

郡山中(市) 内山 伸明



一 はじめに

ここで言う郷土郡山は、平成の大合併前の旧日置郡郡山町を指し、右のマークはその町章である。市HPによると「こ」と「山」の文字を図案化したもので、まわりを囲むことにより円満と平和を、山と左右の広がりが発展する姿を象徴したものとある。以前、OBを含むおやじの会の懇親会で、争いを好まない地域性や幼少時からお互いを知る人間関係などから、「勉強にしても部活動にしても、あまり競争しようとしなくていい」と言われたことを思い出す。本校区内の郡山・花尾・南方の三小学校から入学してくる生徒たちは、純朴という言葉がぴったりな素直な良い子たちで、豊かな自然と地域のおおらかさに育まれたものなのだろうと感じている。

本校から北方に、標高六七七mの八重山と西に延びる尾根を眺めることができる。入来峠頂上から筋に入ると登山口や八重山公園等があり、利用された方も多いだろう。公園から車で五分ほど走ると、鹿児島市民の水瓶・甲突川の源であり「平成の名水百選」に選ば

れている甲突池がある。八重山から絶えず湧き出す「穰の水」は、隣接する八重の棚田を潤す。この地区は市の景観形成重点地区に指定されており、遠く鹿児島市街や錦江湾の眺望と合わせて心落ち着く場所である。ちなみに本校の伝統行事「開校記念八重山遠行」は、本校から八重山公園往復の標高差三二〇m、総距離一七・八kmを走破するものだが、部活動で鍛えられた面々は文字通り走り通すから大したものである。

八重山山系からはもう一本、神之川が流れており、こちらは郡山から日置市伊集院方面を潤し、東シナ海へと注いでいる。また、八重山の東方には花尾山や三重岳があり、その麓には川田川が流れ、郡山を南北に貫く国道三二八号を挟んで流れる由須木川とともに甲突川に合流し、錦江湾を目指す。これらの山々が蓄える豊富な水量で郡山のどかな田園地帯は潤っている。

二 地域の宝を活かし、伝える人々

花尾山山麓には、島津家初代忠久公が建保六(一一一八)年に建立した花尾神社があり、源頼朝や丹後の局などが祀られている。本殿や拝殿などは県指定有形文化財(建造物)となっており、社殿の極彩色の天井は四〇一枚の花絵で埋められ、壮観な景色から「さつま日光」と呼ばれている。周辺の花尾隠れ念仏洞や南泉院などと併せて、歴史を感じつつ散策するには格好の帯である。また、島津家歴代藩主も参詣していたことに由来して鶴丸城から花尾神社まで一七km余りを約七時間かけて歩く「蟻の花尾詣で」は、少年団や部活動生も参加して毎年秋分の日に行われていた

が、今年には残念ながら感染症対策のため中止となってしまった。来年はコロナ禍から解放され、歳を感じ始めたこの体に喝を入れるために参加できればと思っている。

このほかにも、郡山には古来より人々に大切に維持管理されてきた文化財が数多く残されており、それらを活かし、地域の活性化に意欲的に取り組む「郡山地域ふるさとを学ぶ会」や「NPO法人こいやま八重の会」など多くの方々が活動されている。これらに触発されているのか、毎月開催される郡山公民館の生涯学習事業「八重大学」は、年配の方々を中心に毎回百数十名の参加があるという。今年には「蟻の花尾詣で」同様、すべて中止となってしまったが、学びへの熱意を持った方々が多く、これらの活動をサポートする郡山公民館は「地域住民のニーズや地域の特色を生かした多様な学習が展開され、地域住民の生涯学習の拠点として、人づくり、地域づくりに大きく貢献している。」として、昨年度の文部科学省優良公民館表彰を受けている。

三 様変わりする本校周辺

平成五年の八・六水害で本校も浸水し大きな被害を受けたことから、郡山中央地区区画整理事業により市街化が進んでいる。本校周辺は道路や住宅のかさ上げ・整備が行われ、大きく様変わりして、本誌が刊行される頃には本校正門も完成しているはずである。表題は、本稿の参考とした郡山まちづくりワークシヨップ刊行のガイドブックのタイトルを借用していただいた。皆様もぜひこのよきふるさと郡山を、「さるつきゃんせ」。

*** こころの詩 ***

万葉集を詠む

大口の真神の原に降る雪は

いたくな降りそ家もあらなくに

大口のは、真神（狼）の枕言葉（狼は口が大きいことから）。その真神の原に振っている雪は、あまり激しく降らないで欲しい、身を寄せるべき家もないことですので、という趣旨。真神の原は飛鳥地方にあった原、歌い手の舍人娘子は、舍人皇子に仕えた女官だったらしい。身を寄せる家がないというから、雪の降りしきる原のなかで立ち往生しているのだろうか、その様子が目に浮かぶような、素直な歌である。

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和三年一月一日付

大崎町 藤井光興氏

季節の言葉 「初春」

はつはる

初春や恵方に向けて岩城山 宗因

年の始めを寿いで初春という。旧暦の年の始めは、二十四節気の「立春」のころにあたったので、「初春」と呼んで祝った。新暦に変わって冬に正月を迎えるようになった。旧暦の名残から年の始を「初春」と呼ぶ。



編集

後記



明けましておめでとうございます。令和三年がスタートしました。

昨年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために一斉臨時休業となり、再開後の学習の遅れを取り戻す取組やきめ細かな感染防止対策のために、各学校、大変苦慮されたことと思います。また、運動会・体育大会や修学旅行、授業参観や学級PTA等についてもいろいろなことを想定して各学校において、最善の方法で実施されたことでしょう。

そして、小学校では新学習指導要領が全面实施となり、プログラミング教育や外国語教育についての取組も本格化しています。また、GIGAスクール構想の実現のために、児童生徒一人一台のタブレットの導入も進められ、四月からの活用に向けての準備も急がなければなりません。目の前にある課題を学校がチームとして知恵を出し合いながら解決することが必要です。

変化が激しく先行き不透明な時代に自ら問題解決ができるようにするため、「主体的・対話的で深い学び」が求められています。まさに私たち自身が主体的・対話的な学びを常にやっつけていかなければならないようです。目前の難題を解決するために、近隣校と情報交換しながらその時点での最善策を打つ。実施・評価して改善を加えて学校としておれないう対応をすることに力を注いでいきたいと思います。まずは、健康第一で。

最後になりましたが、ご多用の折、玉稿をお寄せいただきました皆様に厚くお礼申し上げます。 深川晴久（武小学校）